健康診断を受診した1,341名を対象として、過去2回の検査値の変化を比較した。平均12年度に「要受診」（総コレステロール値400mg/dl以上）と判定された180名のうち前回より検査値が減少したのは57名であった。この57名のうち有意な総コレステロール値の減少（<10mg/dl以上）を認めた29名のうち13名は前回より体重が減少しており、そのうち5名は歯科健診後自主的に体重コントロールや食事内容の改善を行なっていた。自主的な改善活動を行なっている受診者と、そうでない受診者が同じ判定、同じ指導であることは問題であり、健康診断結果の判定や事後指導において個人毎の経年的データ変化を活用した判定・指導が重要である。

第21回労働者体力研究会
話題は「健康づくりの事例と問題」横木芳彦（株・フィットネス研究所）である。最近の体力動向は、若年層を中心に最大酸素摂取量、身体の柔軟性の低下傾向が目立つ。健康・体力づくりには、対象職業の問題点の洗い出しから始まり、2段階の積み上げ経過が必要である。なお、地域性会社風にマッチした施策、管理職の理解、組織作り、関係団体との連携し、定期的対照より長期的展望に立って対策を練ること。最近の社内LANを利用した「健康住宅急便」などの企画が報告された。

また、当研究会編で企画されていた「職場の体力・健康づくりの展開と効果」は、この3月末に刊行したと報告された。

第64回北方産業衛生学会ならびに平成13年度北海道地方会
＜特別講演＞
労災病院の過去・現在・未来一産業保健との係わりにおいて
浦添猛（労働福祉事業団理事）
＜シンポジウム＞
生活習慣病に対する一次予防〜職域における支援として
何ができるか〜
1．産業医の立場から
関部実裕（釧路労災病院副院長）
2．衛生管理者の立場から
橋本美子（三輪運輸株式会社）
3．産業看護師の立場から
吉田順子（北海道松下電器）
（企業保健婦として）

4．産業看護師の立場から
宮崎由美子（北海道労働衛生管理協会）
（企業外労働専門職員として）

＜一般講演＞
1．道東地域における頸回献血車の解析・献血行動
○山村晃太郎（北海道産業保健推進センター）
北海道十勝釧路及び根室地方における、頸回献血者（全血）の献血行動のパターンを性別、コックス回帰分析等によって検討した。献血期間の開始と終了は1995年1月1日から1999年12月30日までの5年間である。
また、頸回献血者の1回目と2回目の献血の間隔を献血回数別に解析した。
その結果、初回と2回目の献血間隔回数は、献血回数の多いほど短く、またコックス回帰分析でその時点までの全献血者数中の非献血者の割合に、性、年齢等、就業別に差異が見られた。

2．健常労働者における末梢循環・神経機能の評価と季節変動
○小笠原和宏、柿関道彦、山本貢、菊地一公、井本秀幸、小川孝彰、高橋学、真鍋邦彦、内野純一
（釧路労災病院外科）
屋内・屋外で作業する労働者間の比較において、末梢循環・神経機能を評価し、その季節による変動について検討した。屋外作業従事者（屋外群）12名、屋内作業従事者（屋内群）10名を対象とし、冬季・夏季に以下の項目で特殊検査を実施した。1．温度・湿度・飲酒習慣、2．自覚症状、3．血液・消化器検査、心電図・血圧、4．末梢循環機能（皮膚温・冷熱変動）・脈圧検査、5．末梢神経機能（痛覚・癒動覚検査）
自覚症状は、屋外群で多い傾向がみられ、冬季には症状を訴えるものの比率が増加する傾向があった。冬季では4時間10分の皮膚温で、屋外群の方が有意に低い成績を示した。両群とも、常温下ならびに負荷下10分の皮膚温において、冬季の方が低い値を示した。末梢循環機能総合評価は、屋外群のみで冬季の方が悪い傾向がみられた。冬季・夏季ともに、癒動覚検査で屋外群の方が有意に悪い成績を示した。
健常労働者でも、検査上は末梢循環・神経機能障害が発生しないことが確認された。冬季の屋外労働は、より高度な障害の原因となりうることが示唆され、作業環境管理上の保護対策が必要であると考えられた。